

悪役令息に転生したカ
ントが処刑を免れる代
わりに王太子の専属夜
伽係にされて「命が惜
しければ腰を振れ」と
塔に幽閉される話

「……っ、う……ん……っ♡」

暖炉の炎が揺れるたびに、石壁を影が這う。

革手袋の指が寝衣の裾をたくし上げた。太腿の内側——白い肌に冷たい革が這った瞬間、背筋がびくりと跳ねる。

「命が惜しければ腰を振れ」

感情のない声。けれどカイ・ゼフィリオンの金の瞳だけが、暖炉の橙に照らされて獣じみた熱を帯びていた。

「……っ、なん、で……」

「黙れ。お前に口を開く許可は出していない」

革手袋の親指が、カントの割れ目を上からなぞる。

ずり、と。

硬い革が粘膜の入り口を押し広げた。乾いた革の摩擦——痛いはずなのに。

「っ……あ……♡」

身体が、勝手に濡れた。

(なんで——こんなの、で……っ♡)

こんな屈辱的な触り方に身体が応えてしまう。革手袋で。まるで汚いものに触るみたいに。手袋越しでしか触れないと言外に示す、この侮辱に。

カイの視線が、手元ではなく顔に注がれている。表情のひとつ、眉の動き、唇の震え——すべてを見逃すまいとするように。

「……腰を振れと言った」

「むり……っ、そんなの……っ♡」

「死にたいのか」

冷たい声。しかしカイの手は止まらない。

革の指先がカントの襷の間に分け入り、愛液を塗り広げながら奥を探った。ぬちゅ、と卑猥な音が石壁に反響する。

「あ、あ……っ♡♡ そ、そこ……っ」

「ここか」

無感情に。ただ確認するように、革の指が同じ場所を繰り返す。

（やだ……勝手に、腰が……っ♡♡）

腰が自分の意思を裏切って揺れた。革手袋の指に、カントが吸いつく。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ——

「随分と素直な身体だ」

「ちがっ……これは……ぼく的意思じゃ——んっ♡♡」

革の親指がクリトリスの包皮を剥いた。硬い革の縁が直接、むき出しの突起に触れる。

「ひ、う……っ♡♡ あ、おお……っ♡♡」

声が漏れる。堪えきれない。

シーツを掴む指が白くなるほど力が入った。歯を食いしばる。王太子の指に弄ばれて声を上げるなんて——前世の自分が見たら、何と思うか。

看護学生だった。患者の身体に触れるのは日常だった。それなのに今は触れられる側で、しかも処刑を免れる代わりの夜伽係。

「あっ……♡ や、やだ……もう……っ♡♡」

革手袋が二本に増えた。中指と人差し指が、カントの中に沈む。

ず、ぷ。

「ひっ……♡♡ ふか……っ、奥、だめ……っ♡♡」

内壁が革の指に絡みつく。冷たい革と粘膜の熱さの落差が、頭を狂わせる。

カイは指を動かしながら、じっと顔を見ている。

その瞳に、感情が——ない。

（この人は……何がしたいんだ……♡♡ ぼくの身体で、何を確かめてる……？♡）

革手袋の指が、奥の壁をこつん、と突いた。

「あっ……♡♡」

甲高い声が零れ、全身が震える。

その瞬間——カイの動きが止まった。

金の瞳に、初めて何かが揺れる。

カイは左手を持ち上げ、革手袋の端を歯で咥え——右手だけ、手袋を脱いだ。

ゆっくりと。一本ずつ指が露わになる。剣胫で硬い、けれど長くて形の整った指。

「——殿、下……？」

カイの素手が、カントに触れた。

濡れた粘膜に、人の肌が——直に。

「んっ……♡♡♡ て、手袋と、ぜんぜん……ちが……っ♡♡」

指の腹の紋様ひとつひとつまで感じる。革手袋では絶対に伝わらなかった温度と質感が、カントの奥に直接流れ込んでくる。

声を殺しきれず喘いだ瞬間——カイが息を吞んだ。

素手の指が、わずかに震えている。

「……痛くない」

呟き。独白のような。こちらに向けた言葉ではない。

(痛くない……？ なにか……？♡)

意味が分からない。けれどカイの素手は止まらない。革手袋の時とは比較にならない丁寧さで、粘膜の襞をひとつずつ確かめるように撫でていく。

「あ……あっ……♡♡ ゆび、なか……っ、奥まで……♡♡」

前世の知識が、看護学生の観察眼が、混乱の中でもカイの異変を拾い上げる。

——手首の脈拍が速い。呼吸数が上がっている。瞳孔が開いている。

(この人、怯えてる……？ 何に……？♡)

カイの素手が、カントの中からゆっくり引き抜かれた。

愛液に濡れたその手が——頬に触れる。

壊れ物を扱うように。

「……温かい」

カイの声が掠れていた。金の瞳に、涙に似た光が浮かんでいる。

動けなかった。

冷酷な王太子。翠嶺の獅子。処刑台から引きずり降ろして夜伽係にした暴君。——その男が、人の肌に触れて震えている。

カイは手を引いた。無言で革手袋を嵌め直し、背を向ける。

鉄扉が閉まる音だけが残った。

寝台の上で、両脚の間に残る熱と湿り気を持て余す。

(……なんだったんだ、今の……♡)

カントは閉じきれず、愛液が太腿を伝っている。素手で触れられた粘膜が、まだ熱い。

指の紋様の感触が消えない。

「っ……」

膝を抱え、暖炉の前で身体を丸めた。

朝。暖炉の火が落ちて、部屋は薄寒い。

寝台の上で壁を見つめている。太腿の内側に張り付いた愛液の跡が、乾いて皮膚を引っ張った。

（前世は過労死。今世は処刑台から愛玩動物——どっちにしろ、俺は使い捨てか）

窓は高い位置にあって手が届かない。外の光は見えるのに、触れられない。

——あの男と同じだ。

食事が扉の小窓から差し入れられた。銀の盆に、パンと薄いスープ。侍従の手が引っ込む。一言の会話もない。

（完全に隔離されてる。この塔に、ぼく以外の人間はいない）

暇を持て余し、部屋の中を探る。天蓋付きの寝台。分厚い絨毯。壁に嵌め込まれた燭台。暖炉。——暖炉の上の棚に、古い書物が数冊。

埃を被っている。けれど一冊だけ、最近誰かが手に取った形跡があった。埃が拭われている。

開く。

『接触呪痛症——黄昏の塔における臨床記録』

（接触呪痛症……？）

呪術により他者の肌に素肌で触れると、術者自身に激痛が走る呪い。触れられる側には何の影響もない。痛むのは触れた側だけ。

記録には——「呪いの痛みは相手の体温と魔力量に比例する」「低体温かつ低魔力の者との接触では、痛みが軽減ないし消失する場合がある」。

手が震えた。

前世の医学知識が、パズルのピースを嵌めていく。

カントボーイは通常の男性より平均体温が0.5度低い。さらに前世からの体質で低体温気味。手袋を常に着用していること。「潔癖な殿下」の評判。素手で触れた瞬間の、痛みを覚悟した表情——。

（あの人は——素手で人に触れると、自分が痛む。だから手袋を外さない。だから誰にも触れられない）

「痛くない」の意味が、今わかった。

（ぼくに触れても、痛くなかったんだ）

ゆっくりと本を閉じた。

利用されている。この身体は、あの男にとって「痛みなく触れられる唯一の素材」だ。だから処刑台から攫った。だから夜伽係にした。

——それは屈辱だ。

けれど同時に、胸の奥に別の感情が刺さる。

二十年間。誰にも触れられなかった人間が。素手を人の肌に当てて「温かい」と震えた。

（……あんな顔、するなよ……）

暖炉の前で膝を抱え、乾いた愛液の跡を指でなぞった。

三度目の夜。

カイが来た。今夜は手袋を嵌めたまま。昨夜素手で触れた反動なのか、余計に距離を取っている。

「横になれ」

「……はい」

寝台に横たわり、言われるまま脚を開く。

革手袋の指がカントに触れた。いつもの作業。冷たい革が粘膜を探り、機械的に愛液を引き出す。

ぬちゅ、ぬちゅ――

身体は反応する。けれど昨夜の素手を知ってしまった今、革手袋の感触がひどく虚しい。

(……冷たい。昨日と全然違う)

天井を見つめたまま、声を押し殺す。

「……っ」

「今日はやけに静かだな」

「……別に」

カイの手袋越しの指がカントの中を掻き回す。水音だけが部屋に響く。

(この人は――ぼくの身体に触りたいんじゃない。触れるかどうかを、確かめただけだ)

カイの手が一瞬止まった。革手袋の端——手首の隙間から
覗く素肌が、膝の内側に触れる。

ほんの一瞬の、事故のような接触。

けれどカイは手を引かない。

一拍。二拍。

(脈が速い。呼吸が浅くなった。——この人、今、素肌で触
れてるのを確かめてる)

恐る恐る。赤子が初めて何かを掴むように。

カイは素肌を引き剥がし、手袋を直した。

「今日はここまでだ」

立ち上がる。鉄扉に向かう。

手を伸ばさない。口も開かない。

扉が閉まった。

暗い部屋に、ひとりだけが残される。カントは濡れたまま
閉じきれず、太腿を愛液がゆっくり伝い落ちた。

(……つめたい)

暖炉の火が爆ぜた。

四度目の夜。

扉が開く音がいつもと違った。

カイの足音が重い。甲冑の上に外套を羽織っている。遠出
の装い。

「明朝、辺境伯が塔を視察する。第二王子派の策だ。お前がここにいると知られば、死刑囚の隠匿で私が問われる。今夜中に移す」

淡々と。けれど声の底に焦りが滲む。

「夜明けまでに塔を空にする。——その前に、最後だ。横になれ」

横にならなかった。

「殿下」

「何だ」

「——呪いのこと、知っています」

空気が凍った。

カイの金の瞳が刃物に変わる。

「接触呪痛症。他者の肌に触れると激痛が走る呪い」

暖炉の上の古書を示した。

「手袋は潔癖のためじゃない。痛みを避けるため。殿下は幼少期からこの呪いを——」

カイの拳が壁を打った。革手袋越しても赤煉瓦に罅が入る。

「誰に聞いた」

「誰にも。この部屋の本と、殿下の行動を観察しました」

引かない。

「——前世が看護学生だったもので。人の身体の異変を見抜くのは得意なんです」